

趣旨説明

大塚 雄作（京都大学高等教育研究開発推進センター 教授）

松本先生、どうもありがとうございました。総長の方からこのシンポジウムの趣旨もかなりご説明いただきましたので、私の方からは簡単に趣旨説明させていただくことにいたします。

総長の挨拶にもありまして、今年度から教育関係共同利用拠点ということで、FDにかかわる共同利用拠点が全国に7拠点認定されました。京都大学



も「相互研修型FD共同利用拠点」に認定されまして、そういう意味で、われわれも新たな歩みを模索していかなければいけない時期に来ております。ただ、実際にこのようなセンターなどにおりますと、その場その場、その時点その時点でいろいろな課題が与えられて、ともすれば目先の課題に追われてしまうこともありますし、こういった拠点、FDネットワークというもの注目されてきている流れを、大学教育がこれからどう変わっていくのかという、もう少し大きな視野のなかでとらえておく必要があるだろうと思います。また、そういった大きな視点をみなさま方と共有しながら、FDネットワークあるいは各大学のFDの在り方を、改めて考え直す時期に来ているのではないかとも思います。

私は、前任の大学評価・学位授与機構で、大学評価の立ち上げに携わっておりましたが、大学評価が始まったのがちょうど2000年のことで、それから10年たった2010年という節目の年でもあります。その間、大学評価をはじめ、大学教育には大きな変化がいくつも起こりました。そういう意味で、今日は、大学教育改革の流れを大所高所から見渡していただけるような方々に話題提供者としてお集まりいただきました。実は、話題提供者の先生方は、私どもの共同利用拠点の諮問委員として、外部の目から共同利用の在り方にいろいろご意見を賜ることができればということでお願いしております。京都大学は「がめついい」とよく言われることがありまして、本来ならば、このようなFD関係のシンポジウムなどがありましたら基調講演をお願いするような先生方ばかりでありまして、本当に贅沢な顔ぶれです。そのような先生方からいろいろご意見を伺えるこのような滅多にない機会でもありますし、私たちだけ独占するのではもったいないということで公開とさせていただいた次第です。

今、総長の方からご紹介がありましたので、あらためてご紹介はいたしません。私ども共同利用拠点の5人の諮問委員の先生方と小松審議官に、拠点の今後の方向性についての田中センター長よりの基調報告に続いてコメントをいただきますが、プログラムにある順番とは変更させていただきます。先生方からいただいたレジュメなどを参考にいたしまして、マクロな視点からミクロな視点へという流れをもたせてみました。ご提言いただく

順序は、社会や制度などの比較的マクロな視点から、個々の授業活動などのミクロな視点へということを考えてみました。大学教育関係では二つの大きな学会がありますが、比較的マクロな研究視点が中心となる高等教育学会から、比較的ミクロな部分を対象とする大学教育学会という流れにいたしました。高等教育学会の初代会長であられた天野郁夫先生にトップバッター、そして現在の高等教育学会長の舘先生、続いて、羽田先生につなぎまして、大学教育学会長を務められていた寺崎先生、絹川先生という順序としたいと思います。最後に、小松審議官に締めていただこうと思っております。

それでは、まず、京都大学高等教育研究開発推進センターの取り組み、教育関係共同利用拠点として今考えている方向性、私どもが抱えている課題などにつきまして、高等教育研究開発推進センター長・田中每実より基調報告させていただきます。田中先生、よろしくお願いたします。